

# आथ्रस: あーゆす

(発行) 京都市立大学図書館  
京都文教短期大学図書館 / 京都府宇治市横島町千足80

## 活字の力

家政学科・特任講師(中国文学・仏教学) 林 雅 清

高校時代、私は年間100冊近くの本を読んだ。自宅から電車でおよそ1時間かけて高校に通っていたことから、その通学時間を利用して、およそ2日か3日に1冊のペースで読んでいた。ただ、本といっても、ほとんどが文庫本だった。伝奇小説・歴史小説・推理小説・SF小説……ジャンルは多岐にわたるが、中でも歴史や神話、伝説など私の興味と知的好奇心をそそる分野が好きだった。なぜ文庫本かということ、それはもちろん持ち運びに便利だったからである。最初はカバンに忍ばせていた文庫本が、しだいに学生服のポケットの中に堂々と常駐するようになっていった。

本好きかそうでないかは、その人の育った環境がものをいうのだろうか。そういえば、私の場合母親が読書好きで、蔵書(本のコレクション)も多かった。けれども、同じ家で育った弟は小さい頃から活字を読むという行為が苦手だったようで、本はもちろん漫画すらもほとんど読まなかった。「説明書」の類も一切読んだことがないという。ということは、本の好き嫌いに必ずしも家庭環境が強く影響するとは言えないようである。

「本を読もう」、そんな標語が、書店のキャンペーンなどで時折見られる。「読書の秋」という言葉も、毎年台風と共に(?)やってくる。しかし、若者の「活字離れ」が叫ばれて久しい昨今、「ケータイ小説」なるものも流行りだし、いよいよ活字が読まれなくなってきているのではなからうか。

ところで、活字とはいったい何なのだろう。今

では一般的に印刷された文字や本を指して活字といい、自分の意見を本や論文にして発表することを「活字にする」と言ったりするが、もとは活版印刷に用いる「文字」そのものであった。一文字ずつ彫った「活字」を組み合わせて印刷するのが「活版印刷」である。一度彫った「活字」は組み替えることによって何度も使えるため、活版印刷の発明によって印刷技術は飛躍的に発展した。それまで用いられていた「木版印刷」(版木と呼ばれる一枚の板に文字をすべて彫って墨で刷る技法)の文字が一度彫ったら動かさなかったのに対し、何度も転用できる動かせる文字なので、「活きている文字」=「活字」と呼ばれるようになった。

ちなみに、「活字」の発明は中国である。11世紀中ごろ、北宋の畢昇という刻工が、膠泥(モルタル)を用いて「活字」を作り印刷を行ったのが、活版印刷のはじまりである。西洋において近代活版印刷が普及しはじめたのは15世紀半ば(ドイツのヨハネス・グーテンベルクが発明したと言われる)であるから、現存最古の木版印刷が日本の法隆寺に残されている『百万塔陀羅尼』(770年)であることとあわせて考えても、東洋の印刷技術がいかに優れていたかがわかるだろう。

さて、そんな優秀な技術を背景に生み出されてきた活字たち(もちろん現代の印刷は「活字」を用いたものではないが)が、時代を経てどんどん読まれなくなってきているというのは嘆かわしい。

「文字」はパソコンや携帯電話で読んでいると

言われるかもしれないが、やはり画面上の文字と活字は違う。活字には「力」がある。画面上の文字とは違って活字は常にそこに「ある」し、広範囲の文字が同時に視界に入ってくる。文章を読み進めるにも戻って読むにも、一々「スクロール」しなくてよい。文章全体を見渡すことによって、単に文字を読み進めていくだけでは気づかない「発見」（例えば、漢字とかなの配分などに見える文章の美しさなど）があったりもする。いつでも何度でも読み直せ、必要があれば自由に書き込みもできる。そして何より、読書による「想像力」と「感動」をダイレクトに与えてくれる。

いつか、電車の中で『島津奔る』（池宮彰一郎著）という小説を読んでいたとき、涙が止まらなくなったことがある。耳に登場人物の声が聞こえ、目に場面の映像が映し出され、脳裏にBGMまで鳴り響いたのだ。

また、海外留学中は母国の言葉で書かれた活字を読むことによって、一種の安心感を得ていた。

そんな感動や安心感を与えてくれる「活字の力」は、まさに人間の「生きる力」なのである。いま一度、「活字の力」を見直してみようではないか。

（はやし まさきよ）

## 河合隼雄の心理学

臨床心理学科・教授（ユング心理学） 禹 鍾 泰

現在われわれが学んでいる臨床心理学は元来欧米で生まれた学問であり、その理論のほとんども欧米人によって提唱されたといっても過言ではない。そのため、既存の臨床心理学の理論や考え方をそのまま日本に導入し、日本人を対象とした心理療法に適用することには慎重を期す必要がある。日本人初のユング派分析家である河合隼雄先生が、日本に自身の学んだユング心理学を紹介し、その理論を日本人の心理療法に活かしていく際に細心の注意を払った理由もそこにあるといえる。その結果、河合隼雄先生は単なる欧米生まれのユング心理学の紹介にとどまらず、日本的心理学を提唱することに成功したといっても過言ではない。言い換えれば、単に臨床心理学を日本の土壌に合わせて修正したのではなく、新しい人間理解の形を提示したのであり、それが多くの臨床心理学専門家の支持を得た根拠になり得たのである。先生の著書の多くが英語や他の外国語に翻訳され、紹介された理由もここにある。

そういう「河合隼雄の心理学」を理解するために三冊の著書を紹介したい。最初に紹介したいのは『ユング心理学入門』（1967、培風館）である。この本はユング心理学の基本的考え方や概念を理

解するために極めて優れた入門書といえる。河合隼雄先生以降の日本のユング心理学者や臨床家はそのほとんどがこの本を通してユング心理学に出会ったといっても過言ではない、と思う。この本を通してユング心理学を学ぶかスイスで分析家の訓練を受けた人々は、その伝達の正確さ的確さに感心したはずである。というのも、日本で学んだユング心理学が本場のスイスで通用するだろうかと誰もが不安に思うものである。しかし、スイスでも日本とまったく同じ感覚でユング心理学の議論ができるのは、まずこの本の功績といえる。ただ、入門書とはいってもしっかり読み込まなければならない中身となっているのでそれなりの覚悟が必要である。

次に紹介したい『母性社会日本の病理』（1976、中央公論社）は、心理学にとどまらない優れた日本人論であり、日本での臨床活動をもとに日本人の心理を分析した名著である。母性社会とは個人をその能力で判断する父性社会と対比させた概念であり、日本人の場合は個人であることより全体の一員であることを重んじるところから着想を得たとされる。ということは、逆に個性が要求される場面でいかに自身の潜在力を発揮できるかが日

本人の課題でもあることを意味する。その思いを敢えて「病理」という言葉で表現していると思う。近頃、日本に父性が必要だという趣旨の書き物があるようだが、河合先生が30年以上も前に指摘したテーマであることを喚起しておきたい。

最後の『昔話と日本人の心』(1982、岩波書店)も母性社会で指摘された日本的心をキーワードに書かれたものである。これもまた日本の昔話に現れる女性の姿を通して日本人の心を心理学的に捉

えた名著で、日本人の心を理解するためには男性自我の働きばかりに注目するのではなく心の女性的な働きと叡知に注目しなければならないという論旨が非常に説得力をもつ。読み始めると心理学を知らない人でも強く惹きつけられる。河合隼雄先生の他の著書同様、やさしい言葉のなかに深い意味が込められた代表作の一つといえる。

(う じよんて)

### \*\*\*\*\* 私のすすめる3冊 \*\*\*\*\*

家政学科・助教 (スポーツ栄養学) 古川 彩

#### 『じつは、わたくしこういうものです』

クラフト・エヴィング商会 著/平凡社

ポートレートと商売道具の写真とともに自分の仕事について語った、19人の「わたくし」たちの物語。彼らの職業は、「月光密売人」、「秒針音楽師」、「チョコッキのメニューを差し出す料理人」、「時間の管理人」、「シチュー当番をする司書」など、なにやら耳慣れないものばかり。彼らの仕事に対するこだわりは、まさに人生そのものへのこだわり。

とても不思議で、とっても素敵。ウソとホントが巧みに交差する、大人の絵本です。

#### 『【新釈】走れメロス 他四篇』

森見登美彦 著/祥伝社

新訳ではなく新釈。「走れメロス」や「山月記」といった日本文学の古典的名作を、『夜は短し歩けよ乙女』の作者が解釈したらこうなった！表題作の「走れメロス」は、とにかく笑えます。原作はそれぞれ独立した物語なのに、この短編集ではすべて同じ京都の街を舞台に描かれており、登場人物も密接に関連しています。「詭弁論部」や「図書館警察」など、森見作品ではお馴染みのキーワードも多数登場。原作を知らなくても十分に楽しめますが、知っている则ち悔しいくらい面白さが倍増します。今年は大宰治の生誕100周年。これを機に、いろいろ読んでみてはいかがでしょうか。

#### 『レヴォリューションNo.3』

金城一紀 著/角川書店(角川文庫)

この本は、私が定時制高校で働いていたときに、ある男子生徒から「俺の人生を変えた本」と言って紹介された1冊です。オチコボレ男子高校に通う「ザ・ゾンビーズ」たちの疾走感あふれる爽快な学園物語。「君たち、世界を変えてみたくないか？」生物教師の言葉で目を覚ました彼らが抱く野望とは。とにかくばかばかしくて、愛おしい。くだらないことに夢中になって、全力で無茶してバカできるのは1つの才能、素敵なこと。泣けて笑えて、深い。シリーズ続編『フライ、ダディ、フライ』、『SPEED』もぜひどうぞ。

(ふるかわ あや)

図書館で新しく購入された本は、受入・目録・装備作業を終えると新着図書コーナーに並びます。一冊ずつ本の顔を眺めての作業は、新鮮でわくわくしてきます。次の新着図書が来ると、コーナーに並んでいる先の図書は、書庫へと居場所を移していきます。

一冊、また一冊と書庫への排架作業を続けながら、手にした図書『子どものためのたのしい音遊び』を所定の場所へ並びます。ひとたび書庫に並らぶと、表紙は見えず背表紙だけになり、本の印象は変わってしまいます。次の機会にこの本をすぐに見つけることができるだろうか。それぞれの本が、それぞれに目に触れるようにしなくてはと思う瞬間です。この本の前後に並ぶ図書には『サウンド・エデュケーション』『やわらかな音楽教育』『子どもと音楽』…更にショパン、シューベルト…音楽写真文庫、作曲家シリーズがあります。昨日貸出利用があったブラームスの空きスペース。そしてショパンの本。ショパンの本のささやきが聞こえそうです。

次に手にした図書『宮崎駿、異界への好奇心』の表紙には「宮崎作品に〈古代の日本文化〉…自在に読み解く…」と書かれ、思わず目次に目を通すと、「となりのトトロ」「千と千尋の神隠し」「ハウルの動く城」の文字が目に入ります。このまま書庫に埋もれることなく、利用者の目に留まってほしいと思わず祈ります。閉館前、書庫内の点検に入ると、背表紙のタイトルが誘惑的に目に飛び込んできます。読んで見たいと思う本があちこちに見えてきます。時間ができた時に読もうと思うのですが、そのまま忘れさり、「時間はつくるもの」というフレーズが頭をよぎります。

毎年、夏季休暇中に実施している蔵書点検でも、同じ事を思います。図書館内全ての本のバーコードを一冊ずつ読み込む折に「あれっ、こんな本が」と思いがけず自分のお宝を発見し、後日借りることになります。パソコンの検索画面で本の

書誌情報を見るのとは違って、とても感覚的なものです。

大学生や院生が、短大図書館の雰囲気が好きでよく利用しますと語ってくれます。大学図書館に比べると、広さやパソコンコーナー等設備面ではとてもかないません。席数が少なく狭い閲覧室、書庫の通路は狭く、急な階段による高低差のある書庫は、バリアーだらけです。物理的な問題解決には新しい図書館建設しかない環境下、常に利用者の動きに目を配り人的な側面からカバーするしかないという思いです。それだけに、このような声に勇気づけられ、迷いは払拭されます。

一般的に大学図書館は、調べものやレポート課題の情報を得るところですが、本好きで本のおいや程よい思考空間を求める人が好んで集まる場所でもあります。過去の知恵は現代を生きる知恵を生むのではないのでしょうか。誰に邪魔されることもなく本と向かい合い、古典や名著を読み、静かにものを考え、人生のヒントを得る場でないかと思えます。

インターネットの普及は、学術情報サービスを電子化の方向に押し進めてきました。また、アマゾンの「キンドル」の話題で知られるように、出版や流通のネット化は一段と弾みがつきそうです。カリフォルニア大学の石松久幸氏は、ユーザー・フレンドリーに作られたデータベース、電子書籍の普及に伴い、グーグルが世界中の大図書館の蔵書をデジタル化し終えたとき、図書館に足を運ぶ人がいるのだろうか、デジタル環境下の図書館を話題にしています（「出版ニュース」2009.9）。

図書館の機能を考える時、本を通して利用者とのコミュニケーションが時空を越えて展開される「場」としての要素を見落としてはならないと思うのです。デジタル思考とアナログ思考のような質的な違いを生むのかもしれない。

(つづき よしこ)

## 第2回 京都文教大学書評コンテスト 結果

4月に行われた第2回書評コンテストの結果を掲載します。このコンテストは「京都文教大学の100冊」中の気に入った1冊を読み、みんなに紹介しようというものです。

今回は13名の応募があり審査委員の先生方の厳正なる審査の結果、最優秀賞・優秀賞が決定しました。

最優秀賞	文化人類学科	吉岡 太郎	「わからない」という方法
優 秀 賞	臨床心理学科	天田 大樹	萩原朔太郎詩集
	臨床心理学科	竹嶋摩利子	ダ・ヴィンチの謎 ニュートンの奇跡
	臨床心理学科	島本真希子	—『神の原理は』いかに解明されてきたか—
	臨床心理学科	山村まりこ	てつがくを着て、まちを歩こう
	臨床心理学科	山村まりこ	ソロモンの指環
	文化人類学科	神保 宗尚	知的複眼思考法

### ★最優秀賞 書評

#### 「考える」という方法 (橋本治『「わからない」という方法])

文化人類学科4年 吉岡 太郎

「わからない」という方法は本書のどこにも書かれていない。

ここに書かれているのは「橋本治」という方法である。作家・橋本治は自らに降りかかった困難にどう対処してきたのか。どのようにして様々な仕事を成し遂げてきたのか。そういうことが書かれている。

要するに「親爺の苦労話・自慢話」なわけだ。顔見知りの親爺ならまだいいのかも知れないが、少なくとも私は橋本治をよく知らない。知らない親爺の話や延々と聞かされて面白いのか。

これが面白いのである！

困難その1：処女作が完成して書くことがなくなってしまった橋本治。その頃、出版界では「活字離れ」が叫ばれ出す。「よっぽどつまらない本ばかりが多いんでしょ」そうはいうものの、このままでは淘汰されてしまう。そこで彼が考え出した方法とは？

困難その2：橋本治のもとに「[エコール・ド・パリ] (\*)をドラマにしてみませんか」という仕事が舞い込む。でも彼はそもそも「エコール・ド・パリ」を知らない。そんな彼がおのずととってしまった「天を行く方法」とは？

困難にぶつかり、窮地に追い込まれても、橋本治はけして余裕を失わない。困難と格闘し、最終的には、「橋本治」という方法で困難をねじ伏せてしまう。本書は痛快な冒険小説なのだ。

橋本治は「わかんねー、わかんねー、どうしよー」といいながら、「なぜわからないのか」をひたすら考える。「わかるとはどういうことなのか」を考え続ける。すると、わかってしまうのである。本書は知的興奮にあふれた推理小説なのだ。

では、面白いだけの本なのか。

とんでもない。とても役に立つ本である。「わからない」という方法は確かに本書には書かれていないが、その方法は存在する。そう、「あなた」という方法として。本書はそのことに気づかせてくれる。

20世紀は「答え」がどこかにあった時代である。昔なら、人のいうことをただ聞いていれば「正解」に辿り着けたのだ。そんな幻想はもう潰えた。これからは自分の頭で考えるしかない。でも「考える」ってどういうこと？ それを考えるためのヒントが本書には書かれている。

というよりも、本書は橋本治というひとの、「考える」ということについての思考の軌跡そのものなのだ。

\*1920年代を中心にパリで活動した、国籍も画風も様々な画家たちの総称。ルソー、ユトリロ、シャガールなど。



## ◆♥◆♥◆♥◆♥ 『食堂かたつむり』を読んで ◆♥◆♥◆♥◆♥

家政学科 食物栄養専攻1回生 伊東麻衣

近年、私たちは「命を食べる」ということを軽々しく考えてはいないだろうか。マクドナルドでハンバーガーを食べる時、牛の命を食べていること、ファースト・フードの店でサラダを注文した時、野菜の命を口にしていることに気が付いているだろうか。いや、食べ物の命のことなんて考えていないだろう。自分たちの腹を満たすために食べ、満腹になれば残したものを捨てるのだ。私自身、「いただきます」という言葉さえ忘れかけていた。

小川糸著『食堂かたつむり』には、「命を食べる」ということが温かな親子の愛情とともに物語の中で書かれていた。私は、食べることについて改めて考えるきっかけとなったこの本を皆さんに紹介したいと思う。主人公は、二十五歳の女性。十五歳の時に田舎を出て都会のはずれにある祖母の家で暮らしていた。祖母に料理を教えてもらいながらトルコ料理店でアルバイトをし、将来はプロの料理人になろうと決めていた。しかし、ある日祖母が亡くなってしまふ。彼女は、悲しみにくれないながら消沈した毎日を送っていた。そんな時、一人のインド人男性と出会う。二人で小さい部屋を借りて暮らしていた。だが、幸せな日々は続かず、突然インド人男性が姿を消してしまう。出会いと別れが一気に来て、彼女は声を失ってしまう。そして実家へ戻ることになる。物語はここから始まるのだ。実家で待っていたのは、幼いころから不仲であった母と、エルメスと呼ばれる豚。そこは、自然に囲まれた小さな村で、彼女はその土地で自然の食べ物と自分の料理の腕を生かし料理人になることを決意する。作った料理に食べた人が幸せになるよう思いを込めた。すると、料理を食べた人に奇跡が起こるようになるのだ。彼女は、田舎で過ごすうちに「私たちは料理に使う食べ物の命をもらって生きている」ことに気づき、「その命は私たちの中で生きている」ことを知る。

本の中で主人公が数分前まで生きていた動物を料理する場面がある。包丁で頸動脈を切断する。

動物は、多くの赤い血を流す。目を背きたくなるような場面だが、主人公は、見なければいけないと強く思い必死で息絶えた動物を見る。この場面を読んだ時、私は、知らなければならない背景を今まで無視し出来上がった姿を当たり前のようにとらえていたことに気がついた。例えば、スーパーに行けば必ず置かれているハム・ソーセージ。どれくらいの人がある背景を見られているだろうか。私は自分を含めほとんどの人がハム・ソーセージの表面ばかり見ているように感じるのだ。まるで、そのままの形でどこからか発生したもののようにとらえている。しかし、その背景を見れば、生きていた動物であり、誰かが死を見て加工した食べ物なのだ。スーパーで大量に置かれている食品は、その分生きていたものたちが犠牲になっているのである。この事実から私たちは目を背けてはいけないのだ。本の中の主人公は、生きていた動物の命を無駄にしないで料理し、人が食べる時のことをこのように言っている。「姿を変えて、また新たなステージの一步を歩み出す。今度は人間の体に入って、中からその人を元気づけてくれる。命が継承され、慈しまれる。」まさにその通りだと思った。料理をするというのは、命を無駄にしないで最大限のことを行うこと。食べる行為は、「命を食べる」ということ。食べ物が豊富にあり、食べきれなかったら簡単に捨ててしまう今の私たちにとって決して忘れてはいけないことなのだ。

この本を読み終えた後、私は料理をする時や食べる時に対する気持ちが変わった。今まで意識しなかったことを考えることができるようになった。私たちは、生きていくうえで、可哀想だから動物を食べないということはできない。しかし、その命に感謝し、手を合わせ「いただきます」と言うことはできる。そして、今の世の中だからこそ皆さんにこの本を読んでほしい。

(いとう まい)

『食堂かたつむり』小川糸著／ポプラ社